

昨年の暮れ[古希並びに高校卒業 50 周年記念同期会]の知らせをもらって出向いた。

会場には、百人近くの老い耄れ(年を取って心身の働きが鈍くなった人)否、老人もどきの人生経験豊かな美男・美女たちが集った。

昔は人間の平均寿命は 50 年、現代ではそれが延びて 80 年とされる、限りある人生にあって、織田信長が好んで舞ったとされる幸若舞・敦盛の一節を借りると、人間(じんかん)七十年、夢幻(ゆめまぼろし)のごとき時間を旅し、それぞれ波乱万丈の変化、起伏に満ちた人生を過ごしてきた元気な老達である。しかしながら、同期生 3 百余人の中で、50 人近くが物故者となっていることを聞いた。黙祷。

参加者全員避けることのできない「老い」ではあるが、50 年ぶりに見る同期生たちの相貌は、誰もが時間のもたらす必然の結果を表していた。しかし、皆、老い耄れてはいなかった。元気な若い老達であった。

この元気な老達は、皆、今様の高齢者医療制度の前期高齢者(65～74 歳)であり、介護保険の被保険者証の交付を受けている。お世話になっている者は、まだ誰もいないと思うが。

WHO の保健レポート(2004 年版)では、日本人の健康寿命(平均寿命から介護(自立した生活ができない)を引いた数)は、男性 72.3 歳、女性 77.7 歳、全体で 75.0 歳であり、世界第一位である。

平成 25 年度簡易生命表によると男性の平均寿命は 80.21 年、女性は 86.61 年となっている。(昭和 22 年の場合、男性 50.06 年、女性 53.96 年)。また、この表の主な年齢の平均余命を見ると、70 歳で男性 15.28 年、女性 19.59 年となっている。これらのデータによれば、当分は、皆、元気で時間の旅を続けられそうである。

さて、古希のことである。事典を繙くと数え年 70 歳のこと。またはその長寿の祝い(年祝い)のこととある。また、中国唐代の詩人杜甫の「曲江二首」の詩中にある「人生七十古来稀」の語句に由来するとある。

長寿の祝い(年祝い)は、40 歳(不惑)以上を 10 歳ごとに祝ったが、のちに 61 歳の還暦、88 歳の米寿などに変遷したのに対し、70 歳の古希のみ存続した。この年祝いは、中国伝来の慣習で奈良時代から行われてきた。

杜甫の「曲江二首」の詩は、今から 1250 余年前の西暦 757 年、杜甫 45 歳の時の作とされている(杜甫は西暦 770 年、58 歳で没している。)。古希の語句は、この「曲江二首」(七言律詩)の第 4 句の中にあるが、その句意は「どうせ人間の寿命など知れたもので、昔から 70 まで生きる者などめったにいない。」となる。

個人的には、全くの素人だが、この詩の第 7 句、第 8 句の句意「こののどかな春の景色に言伝しよう。お前も私も移ろっていく時の上を一緒に流転しながら、しばしの間お互いに賞(め)であって、背きあうことのないようにしたいものだ。」に深い味わいを覚える。

会場内のあちこちで陽気に喋りあっている中、幹事役から唐突に次回のことが話題に上った。

杜甫が老境を迎え、親しい友と酒を酌み交わしての感慨の中で詠んだ「来年のこの集まりに、果たして誰が健在でいることやら。」との思いが、心地よい酔いに満ちていた頭の中を一瞬過ぎった。古希を迎えた老人の感傷にすぎないことを願ってやまない。

石原慎太郎氏の言葉を借りる。「思ってみるとこれからの十余年の歳月ほど奥の深い幅のある、興味の尽きぬものはないのかも知れない。どんなドラマでも最後の幕が一番実があり感動的なものはないのですから、それを、俺は、私は、もう年だといってあきらめ投げ出すとしたら、それは人生に対してあいすまぬ怠慢としかいいようもない。」(「老いてこそ人生」より)

年も改まった。古希人の旅立ちの時が来た。未知の時間の中をゆっくりと歩いていこう。命尽きるまで。

健康寿命を超え、後期高齢者に仲間入りし、喜寿を祝い、平均寿命を超え、傘寿、米寿と年祝いを重ね、願わくば白寿まで。近い将来、アンチエイジング医学が格段に進展することを夢見て。